

市民が自前のメディアを持つことの意味

— ボランティア・ミニコミ紙『ゆずり葉』をめぐる —

佐野 浩

キーワード：メディア論、市民メディア、ミニコミ、生活記録、市民活動

1. はじめに

新潟県十日町市を中心とする越後妻有郷は社会教育の盛んな土地として知られている。豪雪と過疎の厳しい生活の中、各集落で営まれた婦人学級の実践は、昭和30年代から40年代にかけて、十日町だけでも50種類余りもの生活記録文集を発行するほど活発であった。今でも、吉田地区の文集『信江』や飛渡地区の『わらぼし』通信、津南の『べんきょうするお母さんのひろば』などが発行を続けている。高齢者の交流と、より良い地域の創造を目指して昭和57年（1982年）に発行が始まった高齢者向けのボランティアミニコミ紙『ゆずり葉』も、こうした市民の実践と経験の豊かな土壌の上に花開いたものと考えられる。

後述するように、『ゆずり葉』は、この地域に生きる市民の草の根の学習を象徴する優れた取り組みであった。春になって新芽が出るのを待って席を譲るように古い葉が落ちる「ゆずり葉」は、子々孫々、途切れることなく家運が引き継がれていくことを連想させる縁起の良い植物として親しまれて来た。ゆずり葉グループもそうした願いを込めてこのミニコミ紙を「ゆずり葉」と命名したのだろうが、平成24年（2012年）6月に、25年間、300号をもって終刊した後、『ゆずり葉』と同様のミニコミ紙は現れていない。市民が手をつなぎ、自らと地域を育てて行こうという草の根の運動は潰えてしまったのだろうか。過疎化や高齢化の進行といった世の中の大きな変化の前には、市民の学習は意味を持たないのだろうか。

ここでは、「メディア」という視座から、『ゆずり葉』の実践をとらえ直し、市民が自前のメディアを持つことの意味について考察する。既報¹⁾と合わせてお読みいただければ幸いである。

2. メディアの定義とメディア論の射程

2-1 メディアとは何か

英語の“medium”は、人々や事物の間にあって双方を仲立ちする媒体を指す言葉であり、

その複数形が“media”である。新聞や雑誌、テレビ、ラジオのように、人と人との意思疎通・コミュニケーションを媒介する手段や報道機関などをメディアと呼び、近年ではインターネットや携帯端末を用いた各種の情報通信サービスも盛んに利用されるようになって来ている。

一般に、単に「メディア」と言う場合は、新聞やテレビ、雑誌のような大衆に情報を伝達する「マスメディア」の意味で使われることが多い。マスメディアとは、不特定多数の人々に大量の情報を伝達する「マス・コミュニケーション」を行う媒体や企業・組織体のことである。「マスコミュニケーション」は、大量の情報が一方的に一般大衆に向けてまき散らされる社会現象を指すが、「マスコミ」と略称される場合は、マスメディアと同じ意味で使われる（『現代用語の基礎知識 2005』）。

このように、日常生活の中では、「メディア」はマスメディアやマスコミと同じ意味に用いられるのであり、人々の間に在って双方向に意思を伝え合い、コミュニケーションを仲立ちするというよりは、専門的な知識を有する巨大な組織から大衆に向けて一方的に情報を伝達する意味合いが濃厚である。それだけに、メディアはあらゆる権力から独立し、不偏不党、中立であることが求められ、優れた知見や学識を有する専門家によって権威付けられ、メディア相互の監視と切磋琢磨によって、それは一層強固なものとなっていく。

ここに至って、メディアは送り手と受け手を分断し、一般大衆はメディアの消費者に固定されていくだけのように見える。すなわち、一般大衆は、常に送り手に操作される対象であって、世論の形成や商品の購買意欲、社会の風潮などは容易に作り出せることになる。大衆は、いつの間にかマスコミュニケーションの受容者として組み込まれ、同質化して行く。ここには、民主主義社会の中核である一般大衆が自立し、能動的に自己決定をくだす市民へと成長する展望は見通せない。

しかし、その一方で、メディアは大衆に幅広い知識や文化に接近する機会を与え、成長を促す教育的な作用も併せ持っていると言える。つまり、一方通行的で雑多な情報伝達ではあっても、豊富で同質の情報があるからこそ議論が成り立つのであり、メディアを介した大衆の組織化は起こるのである。子どもが言葉を覚えるのと同様に、マスコミの一方的な情報伝達が新たなコミュニケーションと成長の回路を生み出す可能性があるということである。

こうした多義的で広い外延を持つ「メディア」を巡って、どのような議論が交わされて来たのか、メディアの視座を導入することで何が見えて来るのかを検討しよう。

2-2 メディア論の射程

人と人とのコミュニケーションを媒介するメディアに着目し、メディアやメディアと人間社会・文化の関係といった、メディアに関わる多様な領域を追究する人文社会的なア

ローチをメディア論と呼ぶ。山口（1998）は、メディア論を「メディアの本質、また、メディアがつながっている人間に対する作用の本質、そしてメディアの可能性への問いを扱うものである」（山口1998：98media01.html）と位置付けている。また、水越（2005）は、「メディア」はメッセージの伝達手段という意味とともに、感情や思想を共有する共感装置と言う意味を併せ持つとし、メディアのありようは技術の発達だけで決まるのではなく、これら二つの意味合いがより合わさりながら、様々な社会的要因の相関のなかで形づくられる、と指摘している（水越2005：681）。

両者に共通するのは、メディアを動的なものとしてとらえ、メディアに対峙する人間の在り方を通して、そこから「メディアとは何か」を問い返し、その本質に迫ろうという姿勢である。

十日町の婦人たちが営んでいたボランティアミニコミ紙の活動を考察するのに、こうしたメディアの視座を用いることに如何なる意味があるだろうか。

メディアが人や社会に与える影響については、古くから「メディア効果論」として各種の方面から論じられて来た。しかし、様々な流行や社会現象とメディアの関わりを考える際には、そのメディアで何を伝えたのかという「内容（コンテンツ）」や、そのメディアでどのように情報を伝え、どのように受容したのかという「媒介の仕方」に注目が集まりがちで、メディアそれ自体の存在を見落とすきらいがあった。

このことについて、マクルーハンは、すべてのメディアが人間の感覚の拡張であるとし、「メディアはメッセージである」という言葉で、メディアの内容がメディアの性格にたいしてわれわれを盲目にするということが、あまりにもしばしばありすぎるのだと警告を発していた（マクルーハン1987：9, 22）。メディアは現実を伝えるだけでなく、現実を生産する再帰的な存在であって、メディアの本質を見落としてはならないということである。

マクルーハンは、「メディア」の概念を情報通信の媒体だけに限定せず、自動車や機械といった技術までを含めた「われわれ自身を拡張したもの」ととらえていた。例えば「オートメーション」というメディアの本質は、固定した職務を駆逐し人間を流動化することであり、機械がコンフレクを生産しようがキャデラックを生産しようが、そんなことは全く問題ではないと言うのである（マクルーハンク：7）。

人間が四六時中機械につかまって世話をしなくても、機械が自動的に製品を作るのである。これまで機械に縛り付けられていた人間は解放され、新たな人間関係を再構築して、創造的に働くのである。オートメーションが機械と人間との関係を変えたのであり、それこそがオートメーションというメディアのメッセージだと言うのである。

マクルーハンの言説は、単なる技術決定論ではない。マクルーハンは、「わたくしの言おうとしているのは、メディアがわれわれの感覚の拡張したものであって、相互に作用し

あうとき、われわれの感覚のあいだだけでなく、メディア同士のあいだにも、新しい比率を打ち立てる、ということである」(マクルーハンク:55)として、メディアの混合やメディア相互の浸透・メディアの異種交配の効果について言及していた。それは、「多数のメディア、それを生み出す相克、さらにそれが生み出すより大きな相克を理解することを目的とするものであり、人間の自立性を増大させることによってこれらの相克を減少させる可能性を提起しようとするもの」(マクルーハンク:53)であった。

メディアは感覚の拡張によって人間の認識にアンバランスをもたらす。しかもメディアの混合や相互の浸透・異種交配は不断に、かつ偶発的に生じて行く。そこからもたらされる大きな変化が如何なる方向に進むかは予測できないのである。マクルーハンの「メディアはメッセージである」という言葉は、しかし、少なくともその無意識的な変化・空気に関心であってはならない(和田 2003:186)、という警句であり、重大な問題提起であった。

ゆずり葉グループの活動は、十日町を中心とした越後妻有郷の生活記録運動の中で生まれ育ったものと考えられる。これまでの自身の研究を振り返ると、こうした婦人たちの営みは、豪雪と過疎の厳しい暮らしの中での苦労やそれをどう克服して行くかといった、書くこと、書かれたこと、書きたくても書けなかったことなど、メディアの外にある婦人たちの学習と成長の過程に焦点を当てて検討することが多く、それを支えた生活記録文集やミニコミ紙というメディアに立ち入って考察することはなかった。その結果、個別の事例報告に終始し、その底流に在る、彼女らを突き動かしていた時代の大きなうねりに迫り切れておらず、婦人たちの営みを通して戦後教育をとらえ直すという研究の本質を見落としていたように思われる。

メディアそれ自体の発するメッセージに耳を澄まし、人間や社会に起きつつある見えな大きな変化とその方向を把握する。メディア論の視座を導入することによって、妻有の婦人たちの活動が戦後教育や社会の変化のどの文脈にどう位置付くのか、その意味をとらえ直したい。

3. 生活記録の広がり

本稿の冒頭で述べたように、十日町市のボランティアミニコミ紙『ゆずり葉』は、この地の婦人学級生たちが取り組んだ生活記録の実践と経験が育てた土壌の上に開花したものと考えられる。雪深い農村の婦人たちが、豪雪と過疎の暮らしの中で、自らの厳しい生活の現実を記録し、文集にまとめ、話し合うこの営みは、生活記録運動と呼ばれるものである。

ボランティアミニコミ紙『ゆずり葉』を生み出す元になった生活記録とは何か、なぜ生活記録を書くことが運動化したのか、記録とメディアの歴史的変遷を見て行こう。

3-1 手紙、日記、綴方：生活記録の底流

人々が生活を記録すること、あるいは人々の生活を記録したものを「生活記録」という。手紙や日記などのパーソナルドキュメントやライフドキュメントといった個人的に書き綴られた文書、個人的な記録が生活記録である。生活記録を媒介する様々なメディアは、手紙や日記から始まったものである。

記録とは、「後に残すために文字を以て書きしるすこと、又その書きしるしたる文書」²⁾を言い、広い意味では、物事を書き記したものはすべて記録といえるが、とくに日本史の文献史料に限定すれば、個人もしくは特定の機関が備忘のために書くものを記録と称する。その中心となるのは、日々のできごとを毎日記してゆく日記、すなわち日次記（ひなみき）であり、狭い意味では日記と同義に用いられる語である³⁾。

我が国の郵便事業は、明治4年（1871年）に東京・京都・大阪間で取り扱いが始まった。明治6年（1873年）の差出郵便物は総計56万6千通だが、鉄道の開業や電信・電話の開業など近代化に合わせて取扱数が伸び、開業から20年後の明治24年（1891年）には、書状・はがきだけで1億7千万通を超え、300倍以上に達している（杉山1986：315）。これらの書状やはがきの中には、商取引や公用の文書に加えて、少なからぬ私信が含まれていたものと考えられる。

現在のような「日記」は、明治12年（1879年）に、大蔵省印刷局が官吏に向けて『懐中日記』・『当用日記』を配布したのがはじまりだが⁴⁾、明治28年（1895年）には、博文館から一般に向けての販売が始まるなど、書くこと・記録することが広く習慣化されつつあったことが分かる（近藤2002：22）。

手紙や日記といった「記録」は、大人の間にも広まりつつあったが、子どもは手習いで文字の読み書きを習うことはあっても、記録とは隔絶した世界を生きていた。

手紙や日記の普及に一役買ったのは、小学校の教育である。現代の学校教育で行われている小学生の絵日記や観察記録、日直の日誌、毎日の連絡帳、中学生の生活ノートなどの日記指導は、明治時代の小学校で始まった教育である。たとえば、明治35年（1902年）に出された芦田恵之助の『小学校における今後の日用文及び教授法』には、受け持ちの小学4年生の児童2名に1年間日記を書かせたことが紹介されている。明治33年（1900年）に第三次小学校令改正が行われ、義務教育が無償化され、それまでの「読書」、「習字」、「作文」を合わせ、新しく「国語科」が発足した頃である。

この時の小学校令施行規則によると、国語は「読み方」、「書き方」、「綴り方」からなる教科であるとし、相互に連絡し合い、正確に思想を表彰するの能を養い、常に言語の練習に注意すること、とされていた。それまで、日用文や普通文の作成を教えていた「作文」という教科が、「綴り方」という領域に改められ、児童の作る文章が「綴方」と呼ばれるようになったのはこの時である。

日用文とは、日常使用する手紙文であり、普通文とは、漢文調の漢字かな交じりで書かれた文語体の文章である。この当時の日用文と言えば、漢文調や候文で書かれた注文書や届け出状・送り状など、児童の日常とは隔絶した大人の実務文書をそのまま教えることがほとんどであり、普通文の指導も、教科書の文章を手本とした文章を作る「範文模倣」が普通であった。時勢の進展に合わせ、「形式」より「内実」を重視し、国民の基礎的教養としての思想の表彰と言語教育の発展を目指す改訂であったが、具体的な教授方法は示されておらず、現場は混乱していた。

こうした中で発表された芦田の著書が注目されるのは、明治30年代半ばに、既に小学校で日記指導が行われていたこともさることながら、日用文を「綴方の一部を担当すべきもの」と考え、こうした日記を書かせることによって、「児童の社交界を探知」し、子どもの日常生活に即した日用文の題を構想し、普通文と対等の地位を与えて思想発表を修練することを主張し、その具体的な指導方法を明示している点である。芦田は、児童に書かせた日記から、「児童が必然的に学ばむことを欲するに至らしめ」(芦田1902:39)のような、子どもの生活実感に根ざした手紙の文題を得て、平易な口語体の文章で真情を随意に綴ることが、普通文と同様、国語科教育において思想発表上重要な地位を占めるべき(芦田:37)と主張したのである。

その後、芦田は大正2年(1913年)に『綴り方教授』を著わし「随意選題」による綴り方教育を提唱し、大きな論争を巻き起こした。芦田は、「綴り方は自己を綴るものである」(芦田1972a:195)、「教育の真諦は自己を育つるにあり」(芦田1972b:9)としていた。外に在る事実や用件を伝えるための文章作成練習ではなく、自己の内面を見つめ、自己を成長させるために綴るのであり、大きな転換であった。かくして、日用文(手紙)や日記というメディアが再定義され、それらを運用する元になる形式的な「作文」とは全く異なる、自発的な「綴方」という新たなメディアが創造されることになったのである。

3-2 生活綴方と生活記録

綴方教育は大正デモクラシーの中で盛んになり、児童・生徒の現実の生活を、いつわりのない目で見たまに再現させる写実主義を経て、そこから、自分たちの問題を発見し、思考や行動を発展させていく生活主義へと進んでいった。これらは「生活綴方」と呼ばれ、昭和初年に始まる経済恐慌の中で貧窮に喘ぐ農村や庶民の生活を見つめ、児童・生徒らに困難を乗り越える正しい認識と連帯を与えようとする民間教育運動に発展していった(倉澤他1955:16-22)。

戦前期の学校教育では、児童・生徒に教える文章作成の技術を、小学校では「綴方」、中等以上の学校では「作文」と呼んでいた。子どもが日常の出来事や思ったこと・考えたことをありのままに書く「生活綴方」に対して、大人が書くそれは「生活記録」と呼ばれ

ていた⁵⁾。

大串（1981）は、戦前のプロレタリア文学や信濃毎日新聞に掲載されていた労働体験記録、野澤富美子の『煉瓦女工』や平野婦美子の『女教師の記録』、大日本青少年団の機関誌『青年』・『青少年指導』といった様々な生活記録の系譜を紹介し、「生活記録が日本の青年と婦人がかかえてきた問題を解決する方法として自生的に生まれた」（大串1981：147）と指摘している。

個人的な手紙や日記から出発した生活記録は、「生活綴方」と呼ぶか、「生活記録」と呼ぶかは別として、子どもや一般大衆・婦人も用いるメディアとなったのである。文学表現の形式を除けば、個人の私信や日記を他者に公開することはあり得ず、同じ「生活記録」という名前であっても、そのメディアの形態や意味合いは急速に変化していたのである。戦前期のこれらの2つの営みを媒介したメディアについて見て行こう。

児童の綴方作品は、教師たちの手によってガリ版で印刷され、「文集」という冊子にまとめられ、広がって行った。この手作りの文集は、児童に配布して生きた教材とするだけでなく、知り合いの教員に配って互いの実践を交換し合うのにも使われた。文集は、学級や綴方教師といった共通の目的を持った同質の集団に対する水平的なメディアであった。しかし、『赤い鳥』や『綴方生活』といった中央の雑誌が、こうした作品を積極的に取り上げたことから、範域を広げ、様々な階層や立場の人々を巻き込むことになった。「文集」という小さなメディアが、雑誌というマスメディアを支え、雑誌は文集をさらに鍛えるというように相互に輻輳し合い、生活綴方は急速に運動化して行った。豊田正子の『綴方教室』（1937年）のように、小学4年生の児童が書いた綴方が『赤い鳥』に掲載されたのをきっかけに、出版・映画化されて評判となり、大きな反響と共感を呼ぶこともあった。教室の中の内輪の綴方が、雑誌や単行本、さらには映画へと次々に垂直上昇的に展開し、大きな影響力を持ったのである。

こうしたメディア相互の関係は、大人の生活記録でも同様であった。生活記録は、労働運動や農民運動の高揚の中で『文芸戦線』や『戦旗』といったプロレタリア文学の雑誌や、新聞などの募集に応じて投稿され、掲載されるものが多かった。信濃毎日新聞に投稿された生活記録は、『農村青年報告』として出版されており、『煉瓦女工』や『女教師の記録』は検閲によって公開が遅れたが映画化もされていた。辻（2006）によれば、大正後期から昭和にかけて繊維女工の2割ほどが婦人雑誌を購入し、少数ではあるが日記や労働争議の手記を書き女工生活ルポを投稿する者も現れた（辻2006：57）と言う。しかし、組合運動や労働運動が圧迫される中で、一般大衆が表立って組織的な指導や文集といった自前のメディアを得ることは難しく、大人の生活記録が運動化するのには、戦後に持ち越されることになった。

生活記録が脚光を浴び、社会現象ともいえるべき広がりを見せるきっかけとなったのは、

昭和26年(1951年)に出された無着成恭編『山びこ学校』(青銅社)であった。「山形県山元村中学校生徒の生活記録」と副題が付けられたこの本は、山間に暮らす中学生たちの綴方を集めた学級文集をもとに編まれたもので、もともとは「社会科で求められているようなほんものの生活態度を発見させるための一つの手がかりを綴方にもとめた」(無着1951:193)のものであった。中学生たちが貧しく困難な生活をありのままに綴り、みんなで話し合い、その解決を目指す生々しい実践の記録は、大人たちに衝撃を与え、敗戦後の民主化の中で結成された労働組合や職場・地域のサークル活動の基礎学習として、盛んに生活記録が行われるようになり、運動化したのである。

ここで注目されるのは、昭和26年(1951年)10月に始まった朝日新聞の「ひととき」欄をきっかけに結成された読者の集いである。「ひととき」は我が国の大新聞で最初の女性投書欄であり、「はじまってほぼ三年間に、二万通の投書があった」⁶⁾と言う。組織に属さず意思表示の手段や場を持たなかった住むところも立場も異にする女性たちが、ひととき欄をきっかけに、草の実会やひととき会といった会を立ち上げ、そこから様々な学習や活動が始まり、機関誌や通信が発行されるようになったのである。

特定の主義・主張や利害があって参集し、それを広め、運動を進めるために生活記録を用いたのではない。見知らぬ市井の主婦たちが紙面を通じた呼びかけに応じて各地で集まり、自発的な学習が始まったのである。女性投書欄というメディアが、一方向的なメディアの受容者であった婦人たちからの逆方向の回路・双方向性を生み出したのである。

こうした流れは、雪深い十日町や越後妻有郷の婦人たちにも及んだのである。

3-3 妻有のかあちゃんとべんきょうするお母さんのひろば

妻有の婦人たちの間に生活記録への機運が盛り上がったのは、1960年代に入ってからのことである。この時期は、戦後、役場に入職した職員の中から社会教育の中核となる主事たちが育ちつつあった頃で、中魚沼郡十日町市社会教育振興会に婦人教育研究グループが結成されて、毎週のように集まって勉強会を重ねていたと言う⁷⁾。

津南町に婦人のグループが出来はじめたのは、昭和31年(1956年)頃からだが、実際の契機となったのは昭和33年(1958年)に県委嘱学級として下船渡婦人学級が開設されたことからであり、その後、昭和35年(1960年)に津南町中央婦人学級が文部省委嘱学級として開設され、この頃からその他の地区にもグループが結成されるようになり、地域学級が開設される機運が生まれた⁸⁾。同じ頃、十日町の中条地区でも、婦人会が公民館の協力を得て、母親集会や講座・座談会などの勉強を重ねており、「子供のしあわせと母のしあわせ、新しい母親の生き方を考える」といった話し合い学習を行っていた。この学習の継続を希望する声に応じて婦人学級が開設されたのである。中条婦人学級が、文部省の委嘱学級として指定を受けたのは、昭和33年(1958年)6月のことである⁹⁾。

ここでも、生活綴方運動や生活記録運動と同様のメディア相互の対応関係が見られる。昭和29年（1954年）度から昭和31年（1956年）度までの3年間、静岡県静岡市の稲取町で「生活を見つめよう、生活を高めよう」を目標に取り組みられた文部省委嘱実験婦人学級の実践と比べてみよう。

稲取婦人学級の取り組みは、従来の婦人会の「承り学習」を脱した「話し合い」による科学的な相互学習を目指すもので、生活調査、生活記録、家計支出調査などを行い、グラフや記録集にまとめ、生活改善方法を話し合うものであった。調査・発表を資料にまとめるだけでなく、作文集や婦人学級新聞を発行し、学習の成果は『町の歴史』にまとめられ出版されるに至った¹⁰⁾。

この学習は、これ以降の婦人学級の模範となるもので、十日町・妻有郷でも踏襲された。昭和35年（1960年）8月に出された文集「手をつないで」は、十日町市中条婦人学級の二年間の歩みをまとめたものである。この文集は、学級が生まれるまでの経緯と、「こども」、「幼児」、「か業」、「食生活」、「衣生活」、「農業」という各グループの調べ学習の成果と経過が、図表やグラフにまとめられ、率直な言葉で記録されている。後半は学級生たちの日々の生活記録が掲載されているが、特筆すべきは「小さな自由」と題した切ない嫁の心情を吐露した投稿に対して、身近な知人と話し合ったことや自分の考えを書き綴った返答が誌上に掲載されていることである。

この「小さな自由」は、昭和36年（1961年）11月に津南町で行われた社会教育・婦人研究集会の主題に取り上げられ、郡市内の各婦人学級から集まったリーダーたち119名によって話し合いが行われた。こうした取り組みがきっかけになって、婦人たちの生活の悩みや苦しみを綴った生活記録が書かれるようになり、昭和37年（1962年）には41冊の文集から選ばれた生活記録を集めた『妻有のかあちゃん』が発行されるに至った。津南町では、学級やグループの横のつながりを作り、未組織の婦人にも学習の場を広げることを目的に、昭和36年（1961年）5月に広報紙「べんきょうするお母さんのひろば」が創刊され、4ヶ所において「ひろばの集い」をもち、「ひろば研究室」という4つのグループに分かれて課題を設定して研究し、それを持ちよって大会を開くまでになっていた¹¹⁾。津南町公民館の主事たちは、この婦人たちの学習を次のように評していた¹²⁾。

はじめ700人ほどの読者が、現在1,500人となり廻覧等による読者を加えれば、町の大半の婦人が参加しているものと考えられる。

内容は雑多であり、…系統的な学習集団とは、言いがたい面が多い。しかし、農村の家において、その存在さえ認められなかった婦人が、家を越えて集まることによって、内容はとにかく視野を広くすることができたのは事実であったし、話あうことによって共通の問題を認め合うこともできた。

稲取婦人学級と同様の「文集－広報紙－出版物」というメディアが立ち上がって相互に作用しただけでなく、ここでは、未組織の婦人たちが仲間に加わって、対面での活動を始めていた。学習を推進する作用に加えて、横方向に広げる拡張と、垂直に地域に根を下ろす方向でのメディアの深化・浸透が生じていたのである。

生活記録は、映画や雑誌に映る遠い都会の空の下を映すマスメディアではなく、農村の婦人たちが最も知りたかった身近な人々の本音を映すローカル・メディアであった。

4. ボランティア・ミニコミ紙「ゆずり葉」

4-1 ミニコミとは何か

ミニコミは、個人やグループが発行する小規模の印刷物である。ミニコミには、ビラやチラシ、リーフレットのようなものから、冊子や新聞形式をとるものまで、様々な形がある。戦前の労働運動や農民運動の中で出されていた機関誌や新聞、学校教育の場で作られていた生活綴方文集や各地で発行されていた個人雑誌などは戦前期のミニコミと言える。

こうした出版物は、戦時下の厳しい言論統制の中で弾圧され、その多くが中断に追い込まれた。敗戦後の民主化運動の中で、全国各地でローカル新聞や組合・青年団の機関誌などが一斉に発行されるようになったのは、その反動であろう。

環境保護や福祉といった地域に関する問題であれ、音楽や芸能・芸術に関わることであれ、ミニコミが扱うのはマスコミがほとんど取り上げない事柄や、マスコミとは異なる見方である。

マクルーハンは、新聞は多様な情報を一枚の紙面にモザイク状に配列したもの、公共的参加を促す集団的な告白形態で、多様な情報を並列して日々社会へ暴露している、としている（マクルーハン 1987:208）。新聞は毎日の行為であり、作為（つまりつくられるもの）でもあって、モザイク的手段によって共同体のイメージ、あるいはその断面図に仕立て上げられる、のである（マクルーハン：216）。新聞は本のような「個人的な告白」を複数集めて配列したモザイク的なものであり、本来は個人主義的なものである筈だが、鮮明な活字で印刷され何度も反復されることによって、画一的な集団的態度を形成するという矛盾的な存在だと言うのである。

こうした新聞というメディアのメッセージから、ミニコミの本質が見えて来る。朝日ジャーナル（1971）のコラムは、発生初期の新聞は、発行部数も少なく、また生活密着という点で、ミニコミ的性格をもっていたと指摘している。それが、機械設備や機構の巨大化につれ、管理社会の重要な構成要因となり、体制化するに至ったのだと言う。その結果、マスコミは管理する側の情報にかたよりがちになり、生活に密着した原点の明確な少数者の主張がなければ社会は腐敗するとしている。

このような管理社会の諸問題をえぐりだす役割は学生運動が果たしていたが、今は退潮期で、ここにミニコミ繁茂の土壌がある、と言うのである。こうした性質は、ジャーナリズムの基本であり、ミニコミは小さいながらマスコミに対する対抗的・補完的なメディアとしての重要な役割を担っていることが分かる。朝日ジャーナルのこの特集は、全国の800紙余りのミニコミのリストを掲載し、この生活に根ざした無数の手作りの情報を、「確実に水かさを増しつつある民衆の情念の奔流」、「奔流する地下水」と呼んでいた¹³⁾。

「ミニコミ」という言葉は、『『マスコミ』という大きなジャーナリズムに対する、Mini Communication という和製英語の略』（南陀楼 1999：10）である。第二次世界大戦後、民主主義の潮流により、市民運動を進める場として小さなメディアを作る人々が現れ、1960年安保闘争の中で生まれ、広まった言葉と言われている。

丸山（1986）は、この時代以降に生まれたミニコミを「新しいミニコミ」と呼び、それ以前のミニコミと区別している。丸山によれば、それまでのミニコミは組織に準拠したメディアであり、新しいミニコミは「所属する人々を内側に吸引するという原則を持つ組織性に依拠していない。たとえ、グループを結成しても、地域や職場を超え、独立した市民としてのつながりを前提としている。考え方や問題意識などを唯一の結び目として、横に広げていくためのメディアとして発生してきた」（丸山 1985：15）ものだとしている。

朝日ジャーナルの特集からも分かるように、カウンターカルチャー全盛の70年代前半は、創造的で熱を持った時代であり、「若者の間では、3人寄ればミニコミが出る」ほどのブームであった（丸山 1985：43-44）。しかし、この時期、生活記録運動のピークは過ぎており¹⁴⁾、妻有郷でも婦人たちの文集活動は停滞していた。それから20年余の時を隔てて、高齢者向けのボランティア・ミニコミ紙「ゆずり葉」というメディアを呼び出したものは何か、それは如何なるメッセージを発しているのか見て行こう。

4-2 ゆずり葉を呼び出したもの、ゆずり葉が呼び出したもの

生活記録文集というメディアは、「生活を見つめよう、生活を高めよう」という婦人たちの学習の推進装置であり、文集を結節点とした運動は一定の成果を挙げ、所期の役割を終えつつあった。高度経済成長を背景に、工場誘致に成功し、婦人の働く場所を獲得した集落も出はじめ、現金収入を得て農村の婦人たちの地位は向上し、封建的な村の空気は変わって来ていたのである。

しかし、「嫁は牛馬よりも休むひまがない」、「ねこよりも家の中では地位が低い」といった悩みに代わって、妻有の婦人たちは新たな問題に直面しつつあった。高齢化社会の到来である。

我が国の高齢化率（65歳以上の高齢者が占める割合）は、昭和45年（1970年）に7.1%を越え、高齢化社会に突入した。ゆずり葉グループの面々が婦人学級で「おんなの老い」

をテーマに学習に取り組んだのは、昭和61年(1986年)のことだが、その前年の昭和60年(1985年)の国勢調査では、高齢化率は全国平均の10.3%に対し、十日町市は13.3%と10年先に行くものがあった。

婦人学級のテキストは高原須美子の『女は三度老いを生きる』(海竜社, 1981)であったが、女性は「親の老後や亭主の老後に取り組みながら、自分の老後の準備もしなくてはならない」(高原1986:13)という言葉通りの日常を過ごしている学級生も多くいて、「地域の老後福祉」は彼女らが取り組むべき共通の学習課題となり、3年間の婦人学級での学習後に「婦人学級OGゆずり葉グループ」を結成し、高齢者向けミニコミ紙の発行を始めたのである。

昭和30年代から40年代にかけて盛んだった生活記録文集が、なぜ書かれなくなったのか、十日町公民館の主事たちは、その理由として「過疎が進んで、かつての書き手がいなくなった」こと、そのため文集活動が下火になり「書く機会が与えられなくなった」こと、物質的な「豊かさの中で、問題意識が失われて、書きたいものがなくなってしまった」こと、「書く」ということが本質的におっくうなことで「文集づくりが自主的にできるまでに育たなかった」ことなど¹⁵⁾を挙げていた。

とかく三号雑誌と揶揄されるように、ミニコミ紙、取り分け、組織に依拠しない新しいミニコミ紙にとっては、受け手である読者のニーズや支持が無ければ25年間もの長きにわたって発行を続けることは困難である。決まった書式がなく、手近なチラシの裏に書き付けて気楽に投稿でき、「文字の筆記が不自由な方には、こちらから出かけてお手伝いします」という「ゆずり葉」は、これまでの生活記録文集より敷居の低いメディアであった。

当初、毎月400部から始まった「ゆずり葉」は、高齢者の投稿を中心とした紙面が好評で3,000部まで発行部数を伸ばし、趣旨に賛同した会員170人による市民運動に成長していた。

過疎化の進行の中で取り残される高齢者が急増し、見落とされていた数多くの高齢者の「書き手」たちが「書く機会」を求め、彼らの「問題意識」や「書きたいもの」への思いが、「ゆずり葉」を呼び出したと考えられる。婦人学級時代のゆずり葉グループを指導した松田(1987)は、高齢者向けミニコミ紙発行という活動に、「情報の過疎地帯を埋める」、「高齢者の意見、主張等を発表する場を作る」、「学習と活動を創り出す」といったことを期待したと言う(松田1987:4-5)。

「ゆずり葉」に寄せられた地域の高齢者の投稿を見てみよう。

昔の人は「習い切るといふ事は無い」と言いました。それが、今の言葉で「生涯教育」と言うんでしょうね。何をならっても損ということはありません。足腰の達者のうちに大勢の人に交わって、明るく、その日その日を楽しみましょう。(69歳, ゆずり葉No. 11:2)

懐かしい交流が出来て本当に「ゆずり葉」さん、ありがとうございます。…年上の先輩方のお元気で書いておられるのを読みますと、わたしも何とかついて行きたいと励まされます。生きている楽しい張りがまた一つ増して、本当に「ゆずり葉」さん、ありがとうございます。

(78歳, ゆずり葉 NO. 20 : 3)

皆様、はじめまして－私も句友により「ゆずり葉」のあることを知りました。「読んでみってくれる？よかったらかいてもらっても。」とのことでした。今は老いし人の、若々しい詩や思い出に、私も時折、仲間に入りたいと思いました。…私は“生あるかぎり人生は自分のもの”と思っています。年にこだわらず、前向きに体をいたわりながら楽しみを見つけて己の人生最高であった、と目をつむりたいと欲張っている次第です。よろしく願いいたします。

(73歳, ゆずり葉 No. 33 : 3)

ゆずり葉会員の声によると、ゆずり葉とは、「自分の心の思い出を懐古して筆に託し、原稿を寄せて下さる方々と、編集、発行、配布とそれぞれの人達の心が一つになってできるのがうれしい」、「ユニークな人間性を細かく記されていて共感を感じる」、「みなさんのふれあいひろば」と受け止められていた。その一方で、「耳の遠くなった人、足弱になり散歩も思うように出来ず、自分を訪ねてくれる人も少なくなった人などの、自分の余生をしっかりと見つめて生きようとしている人たちから学ぶものの大なるを思う」といった声も多かった（ゆずり葉 No.37 : 4-5）。

ここから読み取れるのは、高齢者向けミニコミ紙「ゆずり葉」というメディアが、地域で孤独に老いていくだけの弱者と見られていた高齢者に、生涯教育への希望を呼び出していること、そしてその高齢者たちの前向きな姿が、年若い婦人たちにも学習への意欲を呼び出していることである。

「ゆずり葉」は、高齢者と婦人たちの参加と協働の場であり、地域に「学習と実践をサイクル化し、それをらせん的に無限に拡大充実していくためのメディア」（松田 1987 : 6）であったのである。

5. むすびに代えて

1970年代から1980年代にかけての生活記録の停滞期は、急激な過疎化と高齢化の進行の陰で、地域に生涯教育へのニーズを蓄積した時代と見ることができる。

1965年にパリで開かれた成人教育国際委員会でポール・ラングランが提唱した「生涯教育」の概念は、日本ユネスコ委員会によって我が国に伝えられ、「国民の教育を受ける権利を生涯にわたって保障するもの」として受け止められていた。その後、1972年にユネスコの教育国際開発委員会が発表したフォール報告書『未来の学習』は、「生涯教育」に加えて、次に示すように、生涯にわたる学習を通じて人間の完成を目指す「学習社会」

の到来を強調するものであった。

現代の科学は、人間が生物学的に未完成であると言うことを明らかにすることによって、人間に関する知識の上にすばらしい貢献をしてきた。人間は決して成人とはならず、その生存は完成と学習の終わることのない過程であるといえるであろう。人間を他の生物から区別するのは、本質的にはこの不完全性であり、…間断なく学習をしていかざるを得ないのである。

人間は「完全なる生活を目指す」ことをやめないし、完全な人間として生まれようとすることをやめない。このことは生涯教育にとって有利な主たる議論である。

(『未来の学習』1975：187-188)

ここに示された「人間は本質的に不完全な存在であり、その完成を目指して生涯にわたって学び続ける」という理念は、「生涯学習」として広まって行った。ここには、教育を受ける権利を保障する国家の責任よりも、自らを律し、自主的に学ぶ、自立した学習者・市民の成長への希望が見て取れる。

「ゆずり葉」の創刊された1980年代は、国際競争の激化と経済面の行き詰まりから、「生涯教育」に代わって、この「生涯学習」という言葉が使われるようになり、市民の自立が求められた時代であった。「生涯学習」を、生涯にわたる成長と発達の自由とするか、自己責任による学習機会の放棄とするかは、一人一人の市民の選択に委ねられる厳しさを持っている。

こうした中で、「ゆずり葉」というメディアは、ともすれば「もの言わぬ弱者」と見られがちな高齢者や婦人たちが、力を合わせ、希望を持って学び続ける姿を映し続けた。ミニコミ紙と言う小さな自前のメディアを持つことによって、市民の参加と協働の可能性を示したのであり、その成果は、十日町・越後妻有郷の市民活動に継承されたと言える。

今日では、そうした市民の日常の活動は、スマートフォンなどを用いて気軽に記録され、共有され、メディア化しているのは周知の通りである。ここに至って、記録やメディアは、意識の後景に退き、空気のように透明な存在と化している。記録や情報伝達が一般化し、メディア化した日常生活が環境化してしまうと、小さなメディアが持つべき対抗的・補完的な視座を見失いがちになる。

ミニコミは、カウンターカルチャーの申し子であった。メディアに映し出される市民活動の奔流を一体何が呼び出したのか、それは何を呼び出そうとしているのか。日常生活がメディア化した今こそ、我々はメディアのメッセージに耳を澄ませる必要がある。それは、我々が引き継ぐべき営みの重さを自覚し、これからの自立した市民活動の在り方を問うことに他ならないからである。

参考文献

- 1902 芦田恵之助『小学校における今後の日用文及び教授法』, 村上書店.
- 1951 無着成恭編『山びこ学校』青銅社.
- 1955 倉澤栄吉・桑原武夫・国分一太郎他, 1955, 「作文教育」, 下中弥三郎編, 『教育学辞典』第3巻, 平凡社.
- 1972a 芦田恵之助『恵雨自伝(上)』, 実践社.
- 1972b 芦田恵之助『恵雨自伝(下)』, 実践社.
- 1975 ユネスコ教育開発国際委員会著, 国立教育研究所内「フォール報告書検討委員会」訳, 『未来の学習』, 第一法規.
- 1981 高原須美子『女は三度老いを生きる』, 海竜社.
- 1985 丸山尚編著『「ミニコミ」の同時代史』, 平凡社.
- 1986 大串隆吉『「生活記録運動—戦前戦後」覚え書』, 東京都立大学人文学報, pp.141-158.
- 1986 杉山信也「明治前期における郵便ネットワーク」, 應大学経済学会『三田学会雑誌』vol.79, No.3, pp.310-320.
- 1987 マクルーハン著, 栗原裕・河本仲聖共訳『メディア論』みすず書房.
- 1987 松田鐵夫「なぜ、高齢者向けのミニコミ紙を」, 十日町市公民館, 婦人学級レポート集1987, pp.4-6.
- 1998 山口裕之, 1998年度インターネット講座「メディア論とは?」
http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/yamaguci/inet_lec/lec01/98media01.html,
2022年11月30日アクセス
- 1999 南陀楼綾茂「われわれはなぜミニコミを作るのか」, 串間勉編『ミニコミ魂』晶文社, pp.10-23.
- 2002 近藤泰裕『「社会学のなかの日記」と「日記の社会学」』, 市大社会学(大阪市立大学), pp.17-26.
- 2003 和田慎一郎「マクルーハンの《感覚比率》概念について」, ソシオゴロス編集委員会編, ソシオゴロス27号, pp.171-191.
- 2005 水越伸「メディアと社会」, 『現代用語の基礎知識2005』, pp.674-683.自由国民社.
- 2006 辻智子「戦前における繊維「女工」と書くこと・生活記録」, 日本社会教育学会紀要, vol.42, pp.55-64.

注

- 1) 拙著「越後妻有郷における地域教育運動の系譜 十日町市ゆずり葉グループの実践」, 新潟経営大学研究紀要28号, 2022, pp.15-28.
- 2) 平凡社『大辞典』第8巻, 1936, p.354.
- 3) 小学館『日本大百科全書』7, 相賀徹夫編, 1986, p.180.
- 4) 『明治150年関連施設特別展解説書』, お札と切手の博物館, 2017, p.7.
- 5) 辻(2007)は、大正時代の児童の村小学校では「生活記録」という語は、既に日常的に使用されており、教師が書く子どもについての生活記録は、教師が見るだけでなく、子ども本人やその家族が見ることができる開かれたものであったこと、そればかりか、児童の村小学校では、

- 昭和4年(1929年)1月には、すでに子どもたちによる生活記録の取り組みが行われていたことが推測されるとしている(辻智子「生活記録運動の系譜に関する考察」神奈川大学真理・教育研究論集, vol.26.2007, pp.71-79.)。しかし、児童の村小学校の「生活記録」は、大串の言うような大人の「生活記録」とは異なる意味で使われていた別の系譜のように思われる。
- 6) 思想の科学研究会編『共同研究 集団』, 平凡社, 1976, pp.269-270.
 - 7) 戦後まもなくの頃から社会教育の仕事をしていた公民館主事たちは、建設課や商工課と違って、教育委員会の一部門としての公民館は予算も少なく、勤労青年や主婦たちを相手にした目立たない部署であり、何としても実績を上げて、この仕事の意義を認めさせようという気持ちが強かったという。(筆者の聞き取りから)
 - 8) 新潟県中魚沼郡津南町教育委員会「津南町における婦人学習活動の現状」1963, p.4.
 - 9) 上村政基「十日町中条婦人学級のあゆみ」月刊社会教育, 1961年1月号, 国土社, pp.48-54. pp.49-50.
 - 10) 国立女性教育会館アーカイブ,
<https://www.nwec.jp/event/archivecenter/ndpk5s00000019y9-att/inatoripanel1.pdf>, 他.
2022年11月30日アクセス.
 - 11) 前掲「津南町における婦人学級の現状」p.6.
 - 12) ♪ p.5.
 - 13) 朝日ジャーナル 1971年3月26日号「特集・ミニコミ'71 一奔流する地下水」, 朝日新聞社.
 - 14) たとえば大串隆吉『「生活記録運動—戦前と戦後」覚え書』, 東京都立大学人文学報 vol.150, pp.141-158, 1981. や、北河賢三『戦後史のなかの生活記録運動』岩波書店, pp.6-11, 2014. にあるように、生活記録運動は1960年代半ば頃には、全国的にはほぼ停滞したと評されていた。
 - 15) 十日町市公民館「公民館情報」No.25, 1986, p.3.